

こんなはずじゃなかった・まだやってる“どじょうすくい踊り”

中村英生

2011年3月11日の東日本大震災から約一ヵ月後、携帯電話に連絡がきました。「建物の修復が終わったので又きてくれますか…」。私は一昨年春から、福島市・郡山市で“どじょうすくい”の講座を始めていたのです。即座に「ハイッ行きます」と続けますが、さすがに受講者は半減しました。2010年10月頃、福島市のTさんが南相馬市へ行った時、バスの車体の横に大きな“どじょう”が描かれているバスをみて「びっくりしたア〜、自分が“どじょうすくい”を始めていなかったら見過ごしていた…」と話していました。バスは安来節の町・安来市からの寄贈でした。



福島県南相馬市から東京の娘さんのところで避難生活している人が、新聞の折込みをみて「どじょうすくい」を始めて、そして今年6月の福島市での小中学校での同窓会で踊るのを楽しみにしているとのこと。この踊りを通して被災地の人との輪が少しずつ広がっていくものだと実感しているこの頃です。

私が始めたキッカケは、海外工場での社員総出のディナーパーティーで「日本の芸をなにか？」と云われて、「なにかやってみよう」と思っていた折、たまたま見た新聞広告でした。それから始めた“どじょうすくい”は、知人・友人には告げずにただひたすらにコツコツと…たったひとつの踊りだけで…。今ではカルチャーセンターの講師・教室を主宰し、遠くは青森放送主催の民謡大会でのゲスト出演、浅草公会堂その他舞台出演、そして諸施設でのボランティア出演等どれほどのドジョウを掬っただろうか…。安来節の男踊りである“どじょうすくい”は、昔一時期の踊りとは違って、舞台でも観られるほどに品位が高まった形式になり、ドジョウを捕る動作を表情豊かに踊るものです。演芸ボラでは、その場にあった雰囲気や大事にして、愉しかったと観ていただけるよう、笑顔で心豊かに踊れるようこれからも努力していきたいと思っています。2011年秋、ある政党の党首選での「ドジョウは、ドジョウの持ち味がある。金魚のまねをしてもできない…」の演説で、突然表舞台に出てしまった“ドジョウ”ですが、そのマイナーな“どじょうすくい”を心はメジャーにして踊っていきたいです。



しかし、本当はこんなはずじゃなかったのです。定年後は違った姿を夢みていました。定年後、二つの会社を勤め渡っている間も続けてやっていたうちに、結局残っているのはこの踊りだけに…。現在は、二百数十人の安来節保存会東京支部の副支部長になってしまっただけに両足突っ込み状態です。会社勤めでは到底知りえない方々との交流は、多くの輪が出来て、家族から「ホントに家にいる時間が少ない」という言葉を背に受けて今日も出かけています。

サラ文へ加入してからもう10年近いのではないかと思います、行事に参加できる日は多くはありません。しかし、自分から求めていけば様々な趣味を持っている人とお会いできるのがとても楽しみです。サラリーマン文化芸術振興会創立20周年の記念に、新たな芸ごとか、ジャンルの違う趣味でも…と思っています。

そしてザル・カゴを担いで海外単独行して「踊らせろ！」をできれば…と考えているところですが…なかなか。